

私の畑の草花たち

(写真：田中康弘)

どれも季節感や野趣にあふれ、「素朴さ」や「懐かしさ」を思い起こさせる。育てる品目や品種、ふさわしい切り前や荷姿などはいずれも自分で考えたもの



ヨウシュヤマゴボウ

秋に出回る野の植物。黒い成熟した実ではなく緑のつぼみの状態で出荷すると、床などを汚さないからと高値がつく



ユーパトリウム

和名は「セイヨウフジバカマ」。秋の七草の一つである日本のフジバカマ同様、小さな花が集まって咲く。葉だけで売れる品種もある



チョウジソウ

9月から出回る黄色い葉が人気だが、初夏には青い花をつけた状態で、夏はグリーンの葉ものとしても売れる



ススキ

お月見の定番。穂がなくても特徴的な葉だけで売れる園芸種と、十五夜に穂が間に合う自生種がある



ワレモコウ

秋の風情を感じられる代表的な草花だが、秋以外にも葉ものやドライフラワーでも出せる



オミナエシ

秋の七草の一つ。花落ちと腐臭が嫌われるが、花が落ちたあとにシード（タネをつけた姿）の状態に出せば解決できる



ダウカス・キャロータ

いわゆるニンジンの園芸種の花。草姿や草丈、花の色や大きさが多様で、さまざまな花姿で売れる



ノラニンジンのシード

花が終わり、タネをつけて丸くなった状態でも売れる

草花の新しい荷姿

(写真：菅家博昭)



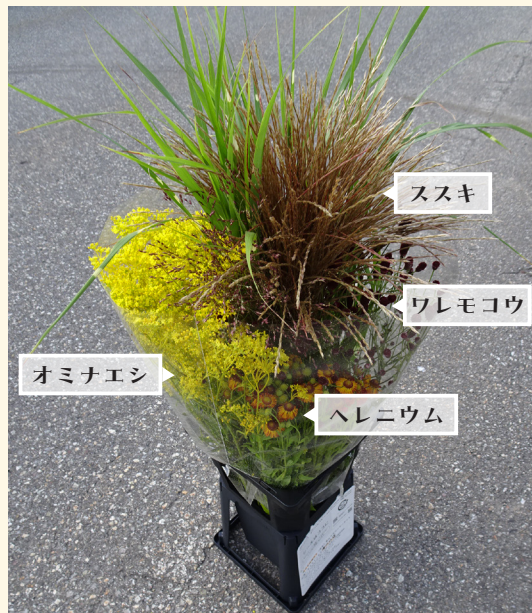
切り前は さまざまでいい

ダウカス・キャロータ（ニンジン
の園芸種）のつぼみ、花、シード
（花
が終わってタネができた状態）。さ
まざまな切り前を一緒に束ねるこ
とで、野で摘んできたかのような野趣
が出る



複数品目を 1箱でアソートに

写真上のようなさまざまな切り前、
草丈の違う品目を少量ずつ束ね、
写真右のように一つのバケツに
入れて出荷する。農家にとっては
少量しかない品目でも買ってもら
える、市場にとっては荷分けの手
間が省ける、生花店にとっては店
頭品目が充実すると、三方良しの
方法



日持ちのために 畑で水揚げ

畑にバケツを持ち込み、1本
切るときにすぐ水に浸ける
（写真はチョウジソウ）。品目
ごとに適した品質保持剤を使
うなどの工夫で、日持ちには
手を抜かない



で稼ぐコツ 草花づくり

菅家博昭 著

「野の花」で
10a100万円
を生み出す
商品化術



農文協

試作の楽しみ

(写真：田中康弘)

どの品目も3年試作するなかで、求められる草丈、切り前などを見つけだす。この「商品開発」が草花栽培の醍醐味だ



1aほどの私の試作圃場。どの品目も5株ずつ植えて、当地の気候や土、自分の経営に合うかどうかを判断する



カスミノウのウネを再利用することで、残肥で育つかどうかを判断する（写真はノラニンジン）

増やしたい野の花からタネを採る



私は福島県大沼郡昭和村の大岐おおたという集落で生まれ育ち、実家を継いで農業をしています。

もともとは葉タバコ栽培と冬の炭焼きを生業としていたのですが、1985年に専売公社がJTに民営化されたことで、わが家は廃作。それ以降は、野のスキを採取したり、コスモスやアスターなどの草花を育てて販売したりしていましたが、県が推進していた宿根カスミソウの専作に落ち着きました。また、1994年から地域の出荷組織である「昭和花き研究会」の代表を務めました。組織は2014年に解散して、現在は地元農協のカスミソウ生産部に所属しています。

組織の代表としての職務から解放された私は、初心に立ち返って植物に向き合いたいと思い、草花栽培を2015年秋から再開しました。大手生花店の社長から「市場にない花をつくってほしい」と提案があったことも、大きなきっかけでした。なかでも草花は「季節を感じられる」「田舎を思い出す」「野趣に富む」と注目が集まりつつあったため、現在の「カスミソウ半分、草花半分」の経営に辿り着いたのです。

売上は同じ面積でのカスミソウ栽培と変わらないですが、扱う品目が増えたことで作業時間やリスクを分散できる、新たなお客さんにつながる可以增加、必要な農薬や肥料が大幅に減るなど、さまざまな利点があります。何よりも、「人々が求めているけれども市場にはまだない花」をつくり

続けることによって時代の変化に対応した経営ができることや、地域の草花を売ることによって身近な自然を社会に進出させられることに大きな喜びと意義を感じています。

草花栽培で一番たいせつなことは「すべて自分で考える」ということです。むやみに草花をつくって出荷するだけでは二束三文にしかならず、新たなお客さんも増えません。たとえば荷姿一つでも、花だけを残して枝葉をすべて取り去る従来の方法とはまったく異なる発想が必要になるのです。

また、高単価で販売し続けるために、まず必要なのは絶えず社会の動きを観察して、世の中がどのような草花を求めているかを観察すること。次に、少ない本数でも3年間試作して、自分の畑でつくれるかどうか、最適な切り前や荷姿は何かを追及することです。

この本では、私の経営や草花の栽培・出荷方法に加えて、新たな品目の探し方や、試作・販売するときの考え方、20品目についての具体例をまとめました。草花においては「これさえつくり続けられれば問題なし」という品目はなく、また地域によっても栽培・流通条件が大きく異なります。本書の内容を参考に、さまざまな経営にプラスして地域や経営に合った草花を導入することで、得られるものは多々あると思います。

この本が読者の皆様にとって、草花栽培や複合経営のヒントになれば幸いです。

2026年4月

菅家 博昭

口絵……………1

まえがき 野趣ある草花をつくる……………8

切り花栽培の用語解説……………12

第1章 草花をつくって売る魅力

世の中は草花に関心大……………14

ラクに取り入れてラクに働ける……………17

いろいろな品目と組み合わせ可能……………19

▼コラム① 露地栽培は生育が不安定?……………21

第2章 私の草花経営——地域基幹品目のカスミソウと組み合わせる

カスミソウが土台、草花で商品開発……………24

一年の働き方……………25

高単価で販売するための工夫……………27

主な営利栽培品目・試作品目一覧……………29

▼コラム② 認証制度は花を使う人のためにもなる……………32

第3章 栽培・収穫のコツ——ラクにつくって野趣感を出す

野趣ある草花は均一でなくていい……………34

試作 まずは5株から……………35

播種・育苗 タネは極力自分で採る……………38

定植〜圃場管理 手間のほとんどは除草……………40

防除 病害虫を気にしすぎない……………41

収穫・調製 見た目は自然に、日持ちは長く……………43

▼コラム③ 花を楽しむ文化ごと売る……………46

第4章 出荷のコツ——高単価でも欲しい!と思わせる荷姿と情報発信

整えすぎないのが自然な荷姿……………48

中身の日持ちで勝負する……………49

アソート納品でいろんな品目を販売……………51

情報をいち早く生花店に届ける……………53

▼コラム④ 市場と生花店で、求める花が違うこともある……………54

第5章 品目選びと商品化のコツ——手間がかからず、さまざまな姿で売れるものを選ぶ

これから売れていくものを見つけ出す……………56

▼コラム⑤ 人々が「心で買う花」を探したい……………61

野趣ある在来草花 ワレモコウ……………62／チヨウジソウ……………64／ススキ……………66／オミナエシ……………68／

ヨウシユヤマゴボウ……………70／トウゴボウ……………72／オトコエシ……………73

地域の花壇の花 姫ヒマワリ(ヘリオプシス)……………74／ジニア(ヒャクニチソウ)……………76／

カラフルニンジン／ノランニンジン……………78／ユーパトリウム(セイヨウフジバカマ)……………80／

セダム(ベンケイソウ)……………82／アキレア(セイヨウノコギリソウ)……………83

地域で育てられてきた特産作物 オヤマボクチ……………84／タデアイ……………86

購入した種苗 ダウカス・キャロータ……………88／ユーカリ……………92／マリーゴールド……………94／

一重のトルコギキョウ(リシアンサス)……………96

カスミソウを複合品目の一つに 宿根カスミソウ……………98

あとがきに代えて——古くて新しい提案……………104

世の中は草花に関心大

私が草花をつくり始めたのは、先述のとおり大手生花店の社長から「市場にない花をつくってほしい」と提案を受けたからです。その後、草花をつくり続けるなかで、世の中の草花への関心が高まり続けていることを実感しています。

世の中から求められているものをつくるためには、絶えず社会の動きを観察することが大切です。ここでは、私がとらえた、草花への関心がうかがえる社会の動きをいくつかご紹介します。

野趣あふれる在来草花が人気

2021年の東京五輪のとき、訪日外国人らに「日本らしさ」をどのようにアピールするのかが、とくに建設・造園業界で議論を続けていました。その際に形になったものの一つが、2020年1月にできた東京銀座中央通りの植栽スペース「ギンザのノハラ」です（写真1-1）。そこに植えられた植物はススキ、オミナエシ、ワレモコウ、チカラシバ、キヨスミコンギクなど、野趣あふれる在来種ばかり。秋の七草が多く選ばれており、日

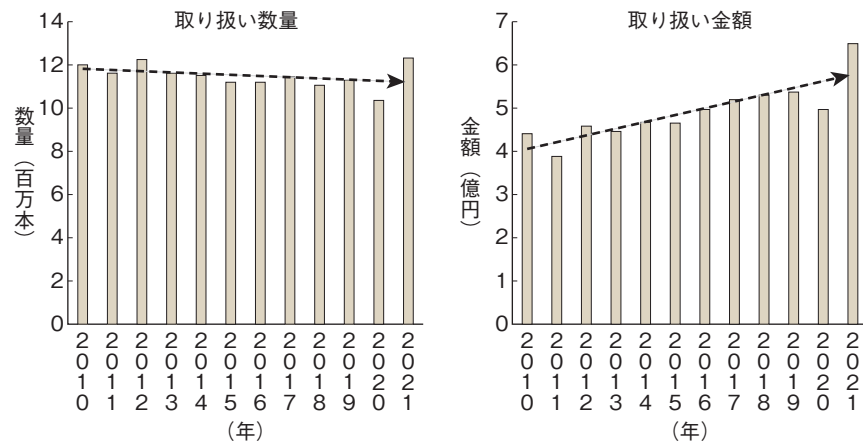


写真1-1 植栽「ギンザのノハラ」

本らしさを十分に演出する素晴らしい植栽です。野原に茂る在来植物の価値が高まったことを、国内外に印象づけた出来事でした。

また、2020年からの新型コロナウイルス感染症の拡大で、海外産の切り花の輸入が止まったことや、巣ごもり需要が高まったことで、屋内でも野趣を感じられる

図 大田花きにおける「その他の草花」取り扱い数量（左）と取り扱い金額（右）の年次推移



数量はほぼ横ばいだが、金額が上がっているため、単価が上昇していることがわかる（内藤育子（2022）「海外を含めた草花類の流通事情」『農業技術大系 花卉編』第4巻、追録第25号動向100の58、農文協より一部改変）

国産草花の人気が高まりました。その結果、卸売市場での草花の単価が高くなり、生産者も増えて取り扱い品目も増えました（図）。

四季の草花に懐かしさを感じている

私は、地域文化を調べて記録に残す「会津学研究会」の代表をしています。

その調査で会津地域の集落を歩き、そのなかでさまざまな人々の話を聞きながら庭を見ていると、四季を感じさせる花や木が植えられ、手入れが続けられてきたことがわかりました。こうした記憶があるからこそ、人々は草花に「懐かしさ」を感じているのだと考えています。

2015年ごろから、自然や懐かしさへの需要が高まり、「枝もの」「ナチュラル」「ボタニカル」といったキーワードが花卉園芸のトレンドになっています。こうした社会的な嗜好の変化を受け、ほかの切り花の生産者からも草花や枝ものを栽培し、とくにユーカーなどを市場出荷することが多くなってきました。

重要なのはイネ科植物

草花を栽培するなかで、種苗会社の方からはタネや苗の提供にとどまらず、欧州の動向を含めた切り花づくり

野趣ある草花は 均一でなくていい

「均一」より「自然な姿」

栽培方法を考える際に把握すべきことは「どのような姿が求められているのか」です。なぜその花が欲しいのか、どのような用途で使われ、どんな期待がされているかを知ること、目指す品質が変わってきます。

たとえば、多くの草花に求められるのは「野原を思い起こさせるような自然な姿」です。それを演出するためには、バラやカーネーションのようにすべて均一かつポリユームのある姿で出荷するのは、草花には「過剰品質」なのではないかと考えています。

欲しいサイズは

市場の規格より短かった

「過剰品質」の内容をもっと具体的に

どのサイズが適切か、試作して確かめてみたり、市場担当者と相談するのがよいでしょう（写真3-1）。

また、あとで詳しく紹介しますが、防除の基準や束ね方、側枝を取り除くか否かなど、草花に求められる品質も、バラやカーネーションとは違うと



写真3-1 ユーカリ (9ページ) を長さごとに選別。短いものには短いりの需要がある (T)



写真3-2 ノランジンはつぼみや葉をつけたまま出荷している。同じセリ科でよく知られるホワイトレースフラワーではない荷姿 (T)

考えてみましょう。
一つには、求められるサイズが変わってきます。今までの切り花は「丈が長ければ長いほど、さまざまな用途で使えるから秀品である」とされ、高値で取引される傾向がありました。

私は考えています（写真3-2）。

扱いやすさ、日持ちは花共通

求められる品質がほかと違うとはいつても「カビや虫がついていないこと」や「落花や種実の脱粒が少なく、装飾場所を汚さないこと」「丈夫で日持ちすること」などはほかの花と共通して求められます。

これらの要望に応えられる品目を時間をかけて選ぶことや、適切な防除・調製をすることは必要です。

また、日持ちさせるために、私はすべての品目をバケツトで湿式輸送（詳しくは第4章）しています（写真3-3）。

抗菌剤や品質保持剤なども品目ごとに最適な方法を検討して、使用することを心掛けています。

求められる条件には応えつつ、過剰な品質を求めないことで、ムダを省きつつ高単価な販売が実現するのです。

試作

まずは5株から

試作圃場に7つのルール

私はカスミノソウハウスの隣に、1aほどの試作圃場を設けています。私の「商品開発」の心臓部です（写真3-4、写真3-5）。

一見無秩序な畑に見えるかもしれませんが、いくつかのルールを設けて管理しています。たとえば、

- ①すべての品目は試作してから本格栽培するか判断する
- ②カスミノソウの後作のウネを利用する
- ③フラワーネットは張らない
- ④植えたらほぼ何もしない
- ⑤虫やネズミに食べられても放置
- ⑥欠株が出たらすぐ次の品目を植える
- ⑦丈夫だった株からタネ採りして、



写真3-3 湿式輸送に使っているバケツトと抗菌剤 (T)

ワレモコウ

秋以外にも葉ものやドライフラワーで



学名: *Sanguisorba officinalis*
 分類: パラ科ワレモコウ属
 結実: 1本60～80cm、10本で一束
 単価: 100円
 株の調達: 根株(裸苗)の購入
 増殖: 株分け

写真5-10 赤紫色の花が特徴の多年草。写真の品種は「かぐや姫」。近年ワレモコウはアフリカで生産が拡大し、欧州などで学名「サンギソルバ」で流通している(T)

月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
ワレモコウ (「かぐや姫」)	定植 (マルチ除去)										播種(育苗)	
	(マルチ除去)										収穫	
											(マルチ除去)	収穫

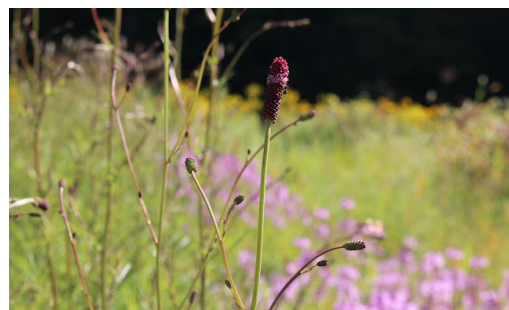


写真5-11 開花直後の姿。穂の先端から順に開花していくので、中央の主枝の穂は4～5分咲き。両端の側枝の穂は青く、花がまだ開いていない。このまま切ると開花は進まず萎れてしまう

魅力
 耐病性品種が見つかった!

秋の風情を感じられる多年草としてワレモコウは重要な植物です(写真5-10)。

ワレモコウ栽培の課題は、うどんこ病、炭疽病、べと病などで、とくにうどんこ病はほぼ必ず発生します。そのため予防や治療のために1週間に一度は農薬を散布することが当たり前で、その負担を嫌って栽培が激減している現状があります。

私は「かぐや姫」(福花園種苗)という品種を主力で育てています。試作したところ非常に病気に強く、当地ではなんと無農薬で栽培できたのです。以来3年ほど継続して根株を購入しています。

わが家では、8月咲きの在来系品種、9月咲きのヒメワレモコウ、10月咲きのかぐや姫のほか、白や桃色の花

害は気にならず、かぐや姫には殺菌剤の散布もしていません。茎が黒くなる場合がありますが、出荷できます。

収穫・調製
 アソートやドライ、葉ものにも

秋ごろ、3～5枝につく花が開いてから採花します。穂の先端につく花か

が咲くワレモコウなども試作しています。

育苗・栽培管理
 露地栽培では倒伏に注意

かぐや姫は、春に根株をポリマルチに株間35cm1条植えて定植し、2年後から出荷しています。ポリマルチは初年の除草のためで、2年目は生育の邪魔になるので春に剥がします。株分けでも容易に増やすことができ、その場合は10月、あるいは5月に定植します。

旺盛な植物で、ウネ全体に根を広げ、1株から20本ほど茎が出てきます。露地栽培では草丈が1・5mほどに伸びるので、風雨で倒れやすい植物です。フラワーネットを1段張り、倒伏防止のためのヒモをウネのサイドに1段、倒れやすい場所は2段張っています。

前年にカスミソウを栽培していたウネであれば施肥は不要です。また、虫

ら順に開花しますが、開花していないつぼみは収穫後に萎れることが多いです。穂の中心の花が満開になると株の劣化が始まるので、鮮度を重視して2分咲きくらいで採花します(写真5-11)。その後結束して、塩素殺菌した水道水に抗菌剤ティーバッグを入れたバケツに計30本入れて出荷しています。結束部分などから外した短い枝はほかの花と合わせてアソート納品(55ページ)していますが、本数が多い場合は60cm、50～100本入りで出荷します。

ワレモコウはドライフラワーとしても利用できます。カビの発生に注意して逆さに吊るし、陰干しすると、素敵な素材として重宝します。

加えて、私は5～6月にワレモコウの葉を葉ものとして出荷しています。葉の場合、根元から30～50cm切って10本束で出します。アソート納品では初夏の定番になっています。